魔法少女
カスミ
悶絶、異世界のフタナリ地獄
桜空
表紙／なえなえ
二次元ぷち文庫
2D PETIT POCKET NOVELS
試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『魔法少女カスミ　悶絶、異世界のフタナリ地獄』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

桜空

表紙／なえなえ

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

カスミ

ひょんなことから魔法少女としてクリスタに召喚され、日々魔獣退治に励む魔法使いの少女。変身時はグラマーな美女になる。本名・小林佳純(こばやしかすみ)。

アイス

カスミを地球から召喚したクリスタの妖精。カスミをサポートする。

エレナ

クリスタで活躍する魔法戦士の女性。カスミをライバル視している。

獣の雄叫びが小さな村に轟く。優に三メートルを超える巨大な熊がクリスタと呼ばれる異世界、小人が住むシム村のど真ん中で暴れまわっていた。

「グオオオオオオオオ！」

再び巨大な声を上げて主張する。

小人は逃げ惑い慌てふためく。

動物園やサーカスに居る熊とは違う、野生のものともまた違って凶暴性や知能が発達していた。それもその筈、あれは似て非なるもの。熊であって熊でない。全く別の生物なのだ。

「ちょっと、そこのあんた！」

巨熊を怒鳴る声に、ガルルと唸りながら背後を振り向く。するとそこには――。

「デカイ図体して、邪魔だから退きなさい！」

眉を吊り上げて理不尽に怒る二十四、五歳くらいの女性の姿。倍に近い身長の熊にキレる女性は見目麗しく、妖艶で誰もが目を奪われる美しさだった。

長いさらさらの髪は左側だけに括られていてサイドポニーテールに纏めている。卵型の顔にぱちっと大きな瞳に、鼻梁の通った鼻。艶のある魅力的な唇といい、全てが黄金比で配置されていた。

「まったく。あんたみたいにデカイのは道の端を蟻みたく小さくなって、悲しそうに歩けばいいのよっ」

時間稼ぎをしてくれているんだ、勝手な解釈をした小人達が纏まりとてとて逃げていく。
「グルル、グガアアアア！」
腹を立てて叫び声を上げた。びりびり空気が震える咆吼に大抵の人間なら怯み、怯えて逃げ出す所だ。
「凄んだってちっとも怖くないんだからねっ！　どうしてよりにもよって今日なのよ」
宙に浮いている生き物が、えっと驚く。
「ちょっ、小人さんがやられて怒ってるんじゃないの？」
美女の顔の横に、ふわふわと漂っている小さな妖精が問う。
「違うわよ。だって今日メチャクチャ早く授業終わって、せっかくミカドのシュークリーム並ばずに買えたのに。こいつの、こいつのせいで！」
「お願いだからそんな理由でクリスタを守らないで」
「だからさくっと終わらして並ぶわよ」
「並ぶんだ」
心の声がポロッと漏れてしまい、ギロリと睨まれる。
「ということだから、早く来なさい」
どうにも締まらないのは二人の会話以外にも、服装に問題があった。
女性の衣装は白と淡いピンクを基調にしたドレスのような、ひらひらとフリルのついた

服。清楚な白いニーソックスといい、可愛らしさを前面に押し出していた。
そして手に持っている武器はといえば、これまた柄が白で本体はピンク色。可愛らしく子供の玩具のような、悪くいえば安っぽいステッキだった。
妖精と思しき一八センチしかない、小さな少女はふわっとしたショートカットが愛らしい。服装もふわふわのひらひら。女性の服装がお嬢様なら妖精の服装は王女様といった感じ。
そんな二人が巨熊と対峙している様は違和感でしかなかった。
「グルル、ガアアアアアア！」
うるさい黙れ、命令するなとでも言いたげに叫ぶ。二人は互いに睨みあう。
改めて巨大な体躯に威圧感を覚えるが、気圧されているのはむしろ熊であるように窺えた。
熊が半歩下がろうとしてやめる。ここで退いたら負けだとばかりに前に、攻勢に出た。
俊敏でとても力強い一撃。大きな手を遥か頭上から振り下ろし、鋭い爪が迫り来る。
魔法使いは獰猛な熊よりも更に素早く半身を捻って攻撃を躱し、たゆんと豊満な胸が揺れる。左手の追撃もバックステップ踏んで華麗に避けると、絶対領域から白い太腿が露になる。
地面に叩きつけられて抉れる土塊が威力を物語っていた。
呪文を高速で唱え、攻撃力の増加した可愛いステッキで熊の腹部を思いきり突く。

「グオオオォン」
悲鳴を上げて動きが止まる。熊から離れて再び呪文を唱え始めた。
「ラブミーラブミー悪い奴をやっつけて〜」
ステッキの先端に付いている星の部分に闇より濃く深い漆黒の球体が生まれ、その周囲を赤い閃光がバチバチ纏っていく。
そして彼女がステッキを熊目がけて振ると、黒い魔法が球体から発射。大気を震わせて恐怖が迫り、巨体を跡形もなく消し去った。
「どうしてこんなバカみたいな呪文なのよっ」
「何で魔法少女が黒い魔法撃ってるの⁉　ねえ何でそんなに強力なの、もう魔王みたいだよ」
魔王なんて言われ地味に傷つく。
「しっ、知らないわよ。大体魔法少女なのに大人なんておかしいじゃない」
「う〜、私だって知りたいわよ。本来純粋な少女しかなれない筈なのに、何でだろ」
とても魔法少女とは思えない魔法で敵をやっつけた二人は、それぞれに悩み、頭を抱える。
「それにしても、最近魔獣が多いわね」
魔獣とは先程倒した熊に似て非なる生物のことで、地球のあらゆる生物に似ている。だが凶暴で邪悪、獰猛さは地球の動物とは比べ物にならない。

妖精や小人を襲うクリスタの敵だ。妖精や魔法戦士の力だけでは対抗しえない状況を見兼ねた、クリスタの女王が妖精を地球に派遣した。

魔法少女として契約、出現した際にはクリスタに召喚され、魔獣と戦うのが魔法少女の日常だった。

「あっ、また貴女達なの⁉」

いつもカスミが魔獣を倒してから現れる、露出過多なドレスを着た魔法戦士のエレナがやはり現れた。紫に艶めく長い髪をなびかせた、大人っぽい女性だ。

狐目で紫の口紅が妖しい女性を演出している。スタイルもよく巨乳で、なめらかなお尻のラインが生々しい。

いつも先に魔獣を倒して出世を邪魔するカスミとアイス、二人を恨み睨めつける。

「そんなこと言うんならさっさと来なさいよ、私はミカドを我慢して呼ばれてるんだから」

「ぅ」

あまりの迫力、目力と殺気にたじろぐ。

「ミッカドミッカド、ミ〜カドミ〜カド。んふふ〜ミカドのシュークリーム、ああ一分一秒でも早く食べたいな」

近所でも評判の大人気洋菓子店ミカド、そのシュークリーム食べたさに並んでまでうき

うきの少女が居た。
長い栗色の髪を両横で括ったいわゆるツインテールの美少女は小林佳純（こばやしかすみ）。目はくりっとしていて愛くるしい。小鼻で口も小さく小動物系の愛らしさが溢れていた。
身長も一四五センチと小柄で、ミカドの名前を嬉しそうに連呼する姿も痛々しくはない。むしろおつかいかな、と微笑ましい光景だった。
「頭脳は子供、身体は大人。まるでどこかの名探偵みたいね」
そう、まだ十代後半のこの小さな少女こそ、先日熊の魔獣を倒した魔法使いだった。
魔獣と戦う為魔法少女に変身すると、なぜか大人の姿になってしまう。そのせいで魔法少女と呼んでいいのかどうか妖精のアイスも困っていた。
一応、あくまでも一応だがクリスタでは『魔法少女カスミ』と呼ぶことにしていた。変身後の外見こそ大人の魅力的な美女だが、頭はまだまだ子供で算数から――
「って誰が子供よ誰が。中身も身体も立派なレディを捕まえて何言ってるの」
拳を握り熱く否定する。
「算数？　数学？　何言ってんの私にかかれば、しゅれでぃんがーの方程式だって――」
「はいはい。あ、前進んだよ」
あ、うんと数歩進んで笑顔になる。
「あともうちょっと、あともうちょっと。あともうちょっとで……あと、もう少ししかな

い。あと……」

嫌な予感が的中してしまった。店員は引き攣った笑顔で常連の佳純を見ない。見ることすらやめて目を逸らし、深々と頭を下げる。

「ほ、本日のシュークリーム完売いたしました。ごめんなさい！」

なぜか謝る店員に店長まで出てきて頭を下げた。

「あ～この間エグイぐらい荒れたもんね」

何があったのかは分からない。だが何かがあったようだ。

佳純の前に並び、シュークリームを三つ買って完売にした主婦を指差す。

「あいつ悪い奴だから闇討ちしていいよね？」

クリスタでしか魔法少女には変身できないのが痛いなと不穏に呟く。

「うん、ダメだよ？」

翌日のシュークリーム五個分を確保して家路に着く。

「まぁまぁ、昨日の残りがまだ一つあったじゃない」

そしてこの一言こそが、後に地獄への布石となることを二人はまだ知らない。

「おっかしいなぁ」

「もう、ほんっとあり得ないんだけど」

二人はかれこれ一時間近くも探して歩き回っていた。だけど見つからない。
「一体どんな魔獣なのよ今回はっ」
苛立ちを言葉に乗せて虚空に放つ。
アイスが魔獣の気配がするからと翌日、ミカドのシュークリームを受け取ることなくクリスタへ召喚されたのだった。
季節関係なく咲き乱れる桜に芝桜や蓮華。タンポポや菜の花に小さな野花が一面に咲き誇っていて、色とりどりの絨毯が視界の先まで広がっている。
青い空がのんびりとさせ、年中輝く虹が美しく空に映える。
何度となく訪れたクリスタでこれだけ発見できないなんて初めてだ。半ばピクニックのような気分で花を眺め、愛でながら探す。
――――――。
――。
だが一向に見つからない。葉の上にてんとう虫、花の上に蝶々がとまっている。いきなり握り潰したらなんだか極悪人に堕ちる気がして、確認のためだとしてもできなかった。
「どうしたの？」
さっきから何度となく何かを払う仕種をしているカスミに問う。
「なんかね、さっきから蚊がプンプンうるさいのよ」

「ふ～ん。じゃ早くヤっちゃいなよ」
「そうね。ラブミーラブミーメ〇オどんと――」
「こないで⁉　なに蚊一匹に、どんだけの魔法使うつもり⁉　メテ〇ってどのゲームでも最強系じゃん！　キレイな野原が一面焼け野原だよ」
「でも直せるでしょ？」
「私の生命を懸ければなんとかなるかもしれないね⁉」
興奮気味に捲し立てるアイスと切なそうに俯くカスミ。
「そっか……じゃいいよね」
「ダメだよ？　もしかしてまだシュークリームのこと怒ってるの？」
「ええそうですとも。残っていた最後のシュークリームを食べても食べても皮ばかり。クリームだけ食べてほったらかしなんてしんじらんないもん」
（なに？　あそこがむずむずする）
「小っちゃいなあ」
カスミはひくんと唇を震わせ、青筋を立てる。
「昨日言ってたよね。もう一つ残ってるからとかなんとか、自分で食ったくせによくもそんなことを……っ」
（う、そでしょ……。どんどん痒く、それに大きくなってる？）

むずむずとした痒みが次第に耐え難いものに成長していく。むちむちの太腿をもじもじとすりあわせるが耐えられそうにない。

「ふぁっ」

大きく伸びる肉芽がショーツと擦れて気持ちいい。痛いほどに股布を押し上げ、びきびきと震えながら成長を続ける。どんどん大きくなる肉芽に恐怖も増大する。

「なに、コレ……」

ひらひらのスカートを下ろして確認した己の股間、その醜悪さに言葉を失う。

「なっ、え？　え、なに。それ」

絶句したカスミ同様、アイスも目を丸く見開く。

肥大化クリトリスが、二十センチ近くにまでなっていて、尋常ではない痒みがクリトリス全体を襲う。とても蚊に刺されたとかそんなレベルでは――。

「まさか！」

気配はあるのに見つからない魔獣。この世界で蚊なんて、あの耳元で不快な羽音を聞いたことなど一度もなかった。クリスタに居ること自体が異常だったのだ。

「もっと早くに気付いてれば」

悔やみながらも右手が股間に伸びる。ショーツを脇にずらすと、ひんやりした外気に過敏な肉芽が晒されて心地いい。

「ちょちょっと、どうしたのそれ。ってゆうか何しようとしてるの⁉」
(少しだけ。少しだけ掻いてみよ。だって掻かないと痒いんだもん)
掻いたらきっとやめられなくなる、そう分かっていても欲望に負けた。
肥大陰核を人差し指で掻く。
「あぁん」
何ともいえない心地よさが広がり、同時にそれ以上の猛烈な痒みが生じた。
「こんなの初めて、どうしたら……と、とにかく掻いちゃだめっ」
アイスが耳元で何か言ってるが頭に入ってこない。
指が一本から二本へ、二本から三本。そして五指で掻き毟るような掻き方から陰核を包み、男性がする自慰のように扱き立てる。
右手を上下動させるだけで快美が溢れ、敵を倒す余裕などなくなる。肥大化して痒くなる以外に攻撃をされていないことから、おそらくそれに特化した魔獣なのだろう。
「ラブミーら、ぶみーわ、るい……だめっ痒くて耐えられない」
だというのに小さな蚊を目で追いきれない。攻撃魔法も狙いが定まらず集中できない。唱える余裕もない。
一往復するだけでも想像を遥かに超えた快楽が迸る。痒い場所を掻く、それは掻痒感が凄まじく誰もが知るとても幸せな行為。

「カスミ、魔獣を倒さないと……」
そんなの分かってる。でも、
「かゆいいぃ、これやめられないっ」
それどころではないのだ。
白いレースの入った股布がぐしょぐしょになり、クロッチ部からでも微かに透けていた。ぬちゃぬちゃ卑猥な音を立てて擦れる布で、己の現状を知る。
（やだ、こんなに濡れてるの？）
手で摩擦するたびに愛液が溢れてきて染みがショーツに滲み、布きれは陰阜に張りついて不快だ。
「あっカスミさんだ」
聞こえてきた声にドキリと心臓が跳ねる。周囲に目をやると、先日熊から助けたばかりの小人が数人、こちらを見上げていた。
知りあいに見つかって心臓が早鐘を打ち、どんどん鼓動が加速する。
「ぁ、ぅ……」
赤面してまともに言葉が出て来ない。口ごもり、何とか手の動きを止めてはみたものの痒みは増すばかり。
「ああっだめえ、かゆいっ」

「痒いんですか？」
「そう、そうなの。だから一人にしてほしいの」
二、三人が耳打ちした後で分かりましたと告げて森の方へ歩いていった。離れたことに安堵すると、背中や額に汗をかいていることに気付く。
「ビックリしたぁ」
こんな所誰にも見られたくない。だが移動する余裕もなくせめて座る。
再びクリトリスオナニーに没頭していくのだが、ものの数分と経たぬ内に小人が三人戻ってきた。
「どど、どうしたの、かな？」
「これ。塗ってあげます」
差し出した手の平に白い塗り薬の入った小瓶があるが、そんな簡単な問題ではない。
「いやいやいや、いいっ、いいから。自分で塗るから、ありがと」
腕や背中とは訳が違う。男性には見られたくない恥部の、それも急所なのだ。小人とはいえ他人には見られたくない。
小人は純粋でいやらしい下心など皆無だと分かってはいるが、それでもそれとこれとは別だ。
「お願いします。いつも助けてもらってばかりですから、どうか手伝わせて下さい」

十センチから十五センチ程度の小人が三人土下座をし、無垢な瞳からは涙をこぼしている。罪悪感がちくりと胸を刺し、締めつけられる。

「あ～もう、分かったわよ！　分かったから泣かないでよね」

手に乗せて女核まで運ぶ。急所を晒して死にたいほど恥ずかしいが、これだけ肥大化していたらもう自分のクリトリスではないんだと言い聞かせる。深呼吸して心を落ち着かせ塗ってもらう。

（うう……自分で塗れるのに、私のクリトリスべたべた触られてる）

人間ではないことがまだ心を楽にしていたのだが、人間の手とは大きさが異なるせいか、今までとは違う刺激に襲われる。

特に擽ったい。こちょこちょと細かい動作ばかりで括れた腰が捩れてしまう。更に小さな舌で舐められるとぴくんっと跳ねてしまい、小人が振り落とされそうになる。

「んひっ、くすぐった、ぁん」

唾液に消毒効果があるのは、小さい頃によく舐めとけば治るなんて父さんが言ってたから分かる。でも、でもそこを舐めるのは勘弁してもらいたい。だがそう言ったらまた泣くのだろうと想像して堪える。

「はぁはぁ……はぁん」

微弱な刺激しか得られずじっと我慢し、塗布し終えた小人を地面に下ろした。そして満

えっちシーン試し読みスタート！

遍なく塗る為に一回二回と扱くのだが、痒みは全く治まらない。
それどころかどんどん痒みは増していき掻いても掻いてもやめられない。
「うそォかゆいっかゆい！　どうしてっ、んああ」
呆然とするのは小人とアイス。次第に彼女に何が起こっているのか理解して小人が慌てる。
「ちょっと、カスミに何塗ったの⁉」
アイスが怒鳴り三人を睨みつける。
「わわ、わからない」
「分からないって……」
「これを塗ったら治るって言われたんだ」
「魔女だ、あの魔女に騙された」
「ごめんなさい！」
謝るなりそそくさと逃げていく。
「あ、ちょっ……」
妖精が追い縋るが相棒が心配ですぐに戻る。
（ま、じょ？）
身体が火照り汗が滝のように流れ、服もショーツも張りつく。呼吸も荒くなり、アイス

はおろおろと狼狽えるばかり。

パチン――指を打ち鳴らす音が響き、アイスが急に動きを停止、地面に落下した。

「あらあらこんなに美しい野原でオナニーだなんて、人間はなんてエッチなんでしょ。それにアイス、躾がなってないわよ」

エレナが森の木陰から姿を現した。

（魔女ってもしかして……）

腰まで届く紫の艶めいた髪をなびかせ、ぴたぴたに張りついて身体のラインを露にする、ロングドレスを身に纏った魔法戦士の姿が魔女と重なる。

「うわ。エロ」

「ううるさい」

臍を中心に菱形にカットされて肌を露出し、脚もかなり深いスリットを入れたこの女に言われたくない。

「あっはっは、必死になってクリチンポ扱いてバカみたい。とんだ変態が魔法少女やってたものね」

反論もできない自分にひどく腹を立てる。唇を噛み締めて屈辱に耐えるが痒みには勝てず、彼女の前で扱く。

狐目でじーっと見つめられて意識してしまい、濡れてきて気分も高まる。ねっとりとね

ぶるような視姦に愛液がこぼれ、ショーツでは吸収しきれなくなる。
「アハハ、あのカスミがオナニーしてるなんて最高。最高だわホント」
ピンヒールで陰核亀頭を踏みにじる。
「あぎっ、はきゅ、ぅ。やめてぇ」
痛い。だが痛みにより痒さも多少は減ったのも事実で。
「クリチンポ踏まれてなんて顔してんのよ」
浅ましい表情を鼻で笑われた。
「セリーリヒ・ディクト・バラーラム」
魔法戦士であるエレナが呪文を唱えると両手が動かなくなる。
「嘘でしょ⁉　こんな、やめて動かして早くっ」
「い・や」
背面立位の体勢にして両手を背中側へ難なく回される。どんなに力を込めてもビクともしない腕が、彼女が持つと簡単に動く。まるで人形にでもなった気分だ。
（ぁ、ぁぁあか、ゆいぃ。痒い痒い！　痒いのに触れないよォ）
摩擦から解放されて勃起がひくつき、切なげに震える。何より痒みが加速度的に増していく。
「……ぇ」

ぎゅっと目を瞑る。
「ねえったら」
「ぁ。ぇ、なに？」
「口でしなさい」
勝ち誇った笑みで命令するのだが、意味が分からない。
「は？　口で、って何をしろっていうの？」
黒いドレスを腰まで捲り上げると、カスミ以上の立派な男根が現れた。
「え。な、んで……？」
この世界の魔法戦士は皆両性具有者であり、男根には鈴口がありちゃんと精液も出る。だがそれを知らなかったカスミは驚愕に目を剥く。
「一回イかせてくれたら魔法を解いてあげる」
「それって」
「そ。手を自由にできるってこと」
魅力的な条件を突きつけ、ずいっと腰を迫り出した。
目の前に差し出された、カスミよりも長く太い肉棒を口に咥える。だが開けて、閉じた口の中に肉棒はない。
「？」

上目遣いで見上げ、小首を傾げる。
咥えろと言っておいて、理解できない。
「咥えさせて下さい、でしょ？　ほんっと躾のなってない牝ね」
ギリッと強く歯を噛みあわせる。しかしむずむずと疼く女芯には勝てなかった。
「くわ、咥えさせて、下さい」
「んもう仕方ないわね。そんなにお願いするんならいいわよ、咥えさせてあげる」
（うぇっくさい。どうしてこんな奴のおチンチンなんか……くそぉ）
臭ってくる腐臭にえずくものの、懸命に堪えて今度こそ口に含む。
「んむうぅ」
口腔に広がる汚臭とゴムみたいな感触が気味悪く吐き出そうとした。
「出したら、分かってるわよね？　分からないなら教えてあげる。魔法をかけたままアタシは家に帰るから」
つまり、ずっとこのまま。おぞましく恐ろしい妄想が脳裏に浮かび、慌てて咥え直す。
「そうそう、それでいいの」
自分のクリトリスは一切触れないのに、他人の剛直を咥えなければならないのは精神的にキツい。
口腔内で舌を動かして拙いながらも太い剛直に絡ませる。顔を前後動させるものの気も

そぞろ、上目遣いにエレナを見やる。
カスミの弱々しい視線にぞくぞくした彼女は胸を両手でかき抱いていた。
（ああうぁ……かゆいよぉ。クリトリス痒いっ、掻きたいのに手が手がぁ）
どうしても動かない手が恨めしい。
口唇奉仕に集中することで痒みを少しでも和らげようと考え、魔法戦士へのフェラチオに没入していく。前後動させるだけでなく舌で素早く舐め回し、頬を窄めて鼻の下を伸ばして啜る。
「ろう？」
「まだまだヘタクソだけど、いいわ許してあげる。だって――時間がかかって辛いのは貴女ですもの」
囁いた小さな声はしかし、彼女の耳にこびりつき脳を直撃した。考えないようにしていたのに、意識させられた。
「痒くて痒くてたまらないのよね」
「やめ、言わないれ。痒くなっひゃうから」
にま～っと意地の悪い笑みでカスミを眺める、彼女の策にまんまと嵌まった。
「ほぉら、早くオナニー再開したいんなら頑張りなさい」
言われた通り口唇奉仕に精を出すのだがどうしても雑念を振り払えない。

「奥まで咥えなさい」
硬い陰茎を喉奥まで頬張って動かすと、じゅぷぐぷと猥褻な音が脳内で反響、淫らな気分が高まる。
ほつれた亜麻色の髪が口元や陰茎に付着して淫靡な雰囲気を醸し出す。それを彼女の代わりにエレナが耳の後ろにかき上げる。
こびりついた恥垢を唾液でふやかして剥がす。苦み走った不気味な味に顔を顰め、それでも彼女の機嫌を損ねないようにと懸命に飲み込む。
恐る恐る見やれば彼女は優越感に浸り、恍惚にも似た表情をしていた。それに比べ自分は……情けないにも程がある。
「じゅずずず、はやっぷらして」
「カスミが一生懸命すればすぐよ」
余裕の笑みで切り返すが実際ひくんと脈打って大きくなり、もうすぐそこまできていた。
ねっとりとした唾液が陰茎に絡みぬめり滑って内頬を突く。そのまま亀頭を擦りつけて口腔粘膜を摩擦する。エラの張ったカリ傘で前歯の裏側を刺激、上顎を擽って口内を蹂躙する。
（ふぐうくさいい、早く射精させて口から出さないと汚い）
口内に牡の臭気が充満して、硬い剛直の感触に脳がくらくら揺れる。

「んぶっ、熱くちぇ喉が灼けそう」
喉奥まで咥えぷるぷるの唇で扱く。
「んふふ、フェラの音がエロいわね」
「ふぉんなこと……」
否定しながらも気付いてる、今まで聞いたことのないはしたない音を演出している事実に。それでも早くイかせないとと思い、更にフェラチオは激しさを増す。
（んんっかゆいかゆい、早く掻きたい！　もう我慢の限界なのにぃっ）
腰が捩れ、淫らに振って悶えた。
ずるる、肉茎を奥まで飲み、紫の濃い陰毛が鼻にかかり擽ったい。唾液に濡れてテカる肉茎が露になり、また口に包まれて消えていく。
出し入れがどんどん速くなり淫音も徐々に大きくなる。だが大きくなるのは音だけではなかった。
（ま、まだ大きくなるの⁉）
怒張が一回りも大きく成長して輪精管を精液が昇ってくる。
「くぅぅ射精る！」
魔法戦士は射精の寸前に怒張を引き抜き、飛び出したザーメンを妖艶な顔にぶっかけた。
「ひゃあああ⁉　熱いぃ。ねばねばで汚い、それに臭いよォ」

美貌が白濁に穢される。
「顔がべちょべちょで、うう汚い」
（でもこれでやっと……早く解除してもらわないと、もう痒くて痒くて、死にそうなんだから）
「ああスッキリした。生意気なカスミに顔射できるなんて。ん？　ああ、あれは嘘よ。まだ放してあげない」
「そんなっ、騙したのね⁉」
悲痛な叫びを上げるも騙される方が悪いとばかりに、そうだけどと返される。ショックから立ち直れない中、エレナは
「もう少しアタシを楽しませてよね」
柔らかくしなる草をひらひらと見せつけ、不穏な微笑で不安を与える。

「ひィはひっ、ももうやめ、んああ」
あれから一時間が経過し、彼女は地獄を味わっていた。
ふわふわでとても触り心地のいいトルネ草（地球でいう猫じゃらしみたいな植物）で、しゃらしゃらと肥大女芯を撫で擽り、一度たりとも満足させてくれない。
絶妙な、痒みに次ぐ痒みの連続で魔法少女の理性は崩壊寸前だった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/